末古窯跡群分布調査報告（「金大考古」第12号から転載）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/34856

末古窯跡群分布調査報告

（『金大考古』第12号から転載）

金沢大学文学部考古学研究室
（現　金沢大学人間社会学域人文学類考古学研究室）

1．はじめに（第１図）

金沢市の南東部、末町・舘山町・辰巳町・浅川町などにまたがる舘山丘陵には、末古窯跡群と呼ばれている律令体制下の窯跡群が分布している。後に述べるように、分布調査・発掘調査はすでに行われており、当窯跡群の概略は明らかにされているが、より詳細な窯跡の分布を明らかにする目的で、当研究室が 1985 年春、7 回にわたって分布調査を行なった。ここにその成果を報告する。

舘山丘陵は、末浄水場付近で一旦くびれて低くなり、再び高くなって白山々系へと続いている。この丘陵の両側には犀川･浅野川がほぼ並行して流れている。丘陵西斜面は開発が盛んで、裾部まで宅地化が進んでいる。また東斜面も高校建設とそれに伴う道路が付けられ、開発が進みつつある。土地利用は、平坦面が水田・畑で、斜面が果樹園・竹林・雑木林である。

2．研究史

末古窯跡群の考古学的調査・研究を簡単に紹介すると、まず『加賀三浦遺跡の研究』(註1) の中で、金山顕光・吉岡康暢氏が末・舘山地区を踏査し、４基の窯跡を確認し、辰口・小松北部地区の窯跡群とともに金沢平野への供給源としてとらえている。

小嶋芳孝氏は、グランド取り付け道路によって破壊された末１号窯跡（ＳＳ－01）の採集資料を 1970 年に発表している (註2)。また小嶋氏は 1975 年にも論考を発表し、氏の分布調査の成果と平野の遺跡との関連、律令体制下での須恵器生産について考察している(註3)。それによると､末古窯跡群の操業年代は、８Ｃ中葉に始まり９Ｃ初頭に最盛期をむかえ、その後衰退したとしている。

報告書としては、1974 年に実施された灰原部分の発掘報告である『浅川１号窯（灰原）調査報告書』(註4) と、1976 年に実施された窯体部分の発掘報告である『浅川２号窯跡発掘調査報告書』(註5) が刊行されている。

3．採集地点（第２図）

Ｓ－１地点

浅川１号窯より北西へおよそ 120 m、丘陵の裾、標高 126 m線に沿って流れる寺津用水分流の用水路の中および土手である。遺物の量は少ない。

Ｓ－２地点

浅川１号窯より北北西 150 mの地点で、石川県教育委員会指定埋蔵文化財包蔵地の標柱が立っている。寺津用水より引いた小水路の中および水田の中に遺物が散乱している。

Ｓ－３地点

Ｓ－２地点より 50 m西側を流れる寺津用水分流よりおよそ２m上（標高 128 m）の丘陵裾で､湧水によって浸食された落ち込みがあり、断面に遺物がささっていた。窯壁片や重ね焼きの状態の遺物・焼きゆがみの遺物などが多数散乱している。現在は竹林であり、階段状に整地されている。

Ｓ－４地点

Ｓ－３地点より 20 m程南東の地点で、Ｓ－３地点から続く平坦面上である。遺物は少量であるが、窯壁片を採集している。現在は竹林である。

Ｓ－５地点

浅川２号窯跡のある畑から１片の遺物を採集した

が、小破片で図化できなかった。

Ｓ－６地点

Ｓ－３地点より北西およそ 100 mの地点（標高 130 m付近）で、現在果樹園となっている所より小破片を１片採集した。図化していない。

Ｓ－７地点

Ｓ－６地点より北西およそ 300 mの小さな谷（標高 130 m付近）より遺物を多数採集しており、窯壁片は無かったものの、中には断面に自然釉のかかったものや、焼ゆがんでつぶれたものもある。現在は果樹園である。

Ｓ－８地点

Ｓ－７地点を東へ 70 m程下った地点（標高 117 m付近）より１片採集した。現在は果樹園である。

Ｓ－９地点

湖南学院の西に広がる果樹園一帯で、標高 112 m～ 118 mの緩傾斜地であり、遺物が広範囲に多数散乱しているが、いずれも小破片である。

Ｓ－ 10 地点

Ｓ－２地点より北東 70 mの道路脇の用水中から１片採集した。

Ｓ－ 11 地点

Ｓ－７地点より北へ 250 m（標高 120 m付近）、果樹園と竹林とにまたがる地点で、土地の人の話によれば開墾の際、出土したものをここに一括して捨てたということである。なお、窯壁片も採集している。

Ｓ－ 12 地点

末浄水場の北、丘陵西斜面にある配水場より東へ 100 mの地点（標高 135 m付近）である。小さな谷になっており、多数の遺物が散らばっている。窯壁片も採集している。現在は竹林である。

Ｓ－ 13 地点

Ｓ－ 12 地点より西へ 10 mの地点で少量の遺物を採集した。中には、断面に自然釉のかかったものもある。現在は雑木林である。

Ｓ－ 14 地点

末町の東の配水場の北西 100 mの地点（標高 130 m付近）で、舘山丘陵から西側へ派生した小さな尾根の南斜面である。遺物とともに窯壁片も採集した。現在は竹林である。

Ｓ－ 15 地点

Ｓ－３地点の南西 10 m（標高 130 m～ 140 m）にあり、現在階段状に整地され、Ｓ－３地点のある最下段より上へ６段目まで､段ごとに遺物が採集された。窯壁片もあり、現在は竹林である。

４．遺物

Ｓ－１地点（第３図－１）

高台付杯で、内傾する高台から外傾しながら体部がつき、口縁部に到って再び内傾気味になる。

Ｓ－２地点（第３図－２～４）

高台付杯（No. ２・３）と無台盤（No. ４）である。No. ２は短かく直立する高台をもち、No. ３は外側へしっかりふんばる高台をもつ。No. ３の底部にはヘラ記号がみられた。No. ４は、器壁が厚く、全体的に重厚な感がある。

Ｓ－３地点（第３図－５～ 16, 第４図－ 18 ～ 27, 第５図－ 28 ～ 31）

No. ５～８は蓋で、口径は 21.1㎝（No. ５）・19.0㎝（No. ７）・13.6㎝（No. ８）と３種類にわかれ、３器種の蓋が想定できる。No. ５・７は、口縁部を外傾させ、No. ８は直立気味にしあげており、天井部も No. ５・７にくらべ平坦となっている。三者とも天井部と口縁部との境界は不明瞭である。No. ９・11・12・13・16 は、高台付杯で、口径 17㎝・底径 12㎝前後のグループ（No. ９・11・16）と、底径９㎝前後のグループ（No.12・13）にわけられる。前者のうち、No. ９は外側にふんばった高台から体部に到り、外反する口縁部をもつのに対し、No.11 は直立気味で短い高台をもつ。No.16 は No. ９と同様の高台をもつ。後者のグループは、短かく外傾する高台をもつのである。No.10 は高台付盤で、口径 18.8㎝と大きく、高く、しっかり外側にふんばる高台をもつもので、口縁部でかるく外反させている。なお、No. ６・15・18・

20・22・26・27・30 は破断面が二次的に焼け、自然釉が付着しており、窯跡よりの資料であることは明らかである。

Ｓ－７地点（第５図－ 32 ～ 47）

No.32 ～ 41 は蓋で、口径 19㎝前後のグループ（No.32･33･41）と口径 13.5㎝前後のグループ（No.37 ～ 40）にわけられる。前者のうち、No.32・41 は口縁部を内傾させているが、No.33 は外傾もしくは直立気味である。また、No.32 は口縁部と天井部の境界がやや段をなすのに対し、No.33・41 はそれが不明瞭である。後者は、No.37 をのぞいてすべて平坦面となった天井部から段をもって口縁部に到るもので、口縁部も直立もしくはやや内傾気味のものである。No.37 は段をなさずに天井部から口縁部に到るもので、口縁部は外傾する。鈕の確認できるものは、宝珠形のものが No.32、ボタン状のものが No.34・35、その中間形のものが No.36 である。No.42 ～ 47 は高台付杯であり、口径 14cm 前後・底径 11cm 前後・高 6 ㎝前後のグループ（No.43・45）と、口径 13㎝前後・底径 8 cm 前後・高 4 ㎝前後のグループ（No.42・44・46・47）にわけられる。前者のうち、No.43 は屈曲して外に張り出すしっかりとした高台をもち、体部に到り口縁部が外反するものと考えられ、No.45 は、ひしゃげたような高台から体部に到って、口縁部が外反するものである。後者はすべて外傾する高台をもち、体部から口縁部までほぼ直線的にのびるもので、その中で No.47 はやや異質の感をうける。No.34 は焼き台であり、No.37・40・46 には重ね焼きの痕跡が明瞭である。

Ｓ－８地点（第６図－ 48）

高台付杯で、短かく外傾した高台より、鈍角的に体部に到るものである。

Ｓ－９地点（第６図－ 49 ～ 57）

No.49 は高台付盤で、高台が体部により近い位置についている。No.50 は小型壺の底部と考えられ、回転糸切り技法が用いられている。

Ｓ－ 10 地点（第６図－ 58）

壺の底部と思われ、底部と胴部の境界に高台がつき、外へ強く張り出すものと想定できる。

Ｓ－ 11 地点（第６図－ 59・60、第７図－ 61 ～ 70）

No.59・60 は、高台付杯で、No.59 は外にふんばった高台から外傾する体部に到り、口縁部がかるく外反するものである。No.60 は、No. 2・12・48 と同様の、端部にかけて幅狭になり、かつ、直立気味の高台をもつもので、体部は外傾度が弱く直立気味である。No.61 は無台盤である。No.62 は蓋で、器高はかなり低い。平坦面となった天井部より段をもって外傾する口縁部に到る。

Ｓ－ 12 地点 (第７図－ 71、第８図－ 72 ～ 81)

No.71 は鍋と考えられる。頸部より外傾し、口縁端部は上方に屈曲する。No.72・73・77・78 は高台付杯で、口径 16㎝前後・底径 11cm 前後・高 6 ㎝前後のグループ（No.72・73）と、口径 12㎝前後・底径 9 ㎝前後・高 4 ㎝前後のグループ（No.77・78）にわけられる。前者は外傾もしくは直立気味の高台から直線的に外傾する体部に到り、口縁部が外反するものであり、後者は外傾もしくは直立気味の高台から直線的に外傾する体部に到り、そのまま口縁部に到るものである。No.74・75・79 は無台盤で、No.74・75 は口径 16㎝前後・底径 13㎝前後のものであり、No.75 の口縁部はゆるく外反する。No.80 は無台杯である。体部内面に稜をもち、体部～口縁部にかけて肉厚で直線的にのびる。土師質である。No.76・81 は蓋で、No.81 は中央が突出したボタン状の鈕をもち、天井部から口縁部へ段をもたずに移行し、口縁端部は内傾する。No.76 は生焼けで土師質である。

Ｓ－ 13 地点（第８図－ 82・83）

No.82 は高台付杯で、直立気味に外傾する高台から、内彎気味の体部に到る。No.83 は無台盤で、底部から体部へは鋭角的に移行し、体部はいったん屈曲して外へ張り出し、内彎しつつ口縁部へ到る。

Ｓ－ 14 地点（第８図－ 84 ～ 90、第９図－ 91 ～ 96）

No.84 ～ 86 は蓋で、No.84 は平坦な天井部をもつ大型品である。天井部外面にはヘラケズリは認められない。No.85 は、外傾する口縁部から段をもって天井

部に到るものである。No.86 は比較的高く、広い天井部から狭い段をもって口縁部に到るものであり、口縁部は外傾する。No.87 ～ 89 は無台盤で、口径 17 ㎝前後・底径 14cm 前後・高 2 ㎝前後のものである。形態は三者三様で、No.88 がいちばん外傾度が強く、底部から体部へ鋭角的に移行し、直線的に口縁部へ到る。外傾度が弱いのは No.89 で、底部より体部へ鋭角的に移行し、体部が中央でいったん外側へふくらんで再び内側へもどり、口縁部は若干外反する。No.87 は底部より体部へ鋭角的に移行し、外傾度は前二者の中間である。No.90 は高台付杯で、短かく外傾した高台より体部に到るものである。No.91 ～ 96 は甕の胴部片であるが、No.91 は焼き台で、内面に高台の痕跡が円形に残っている。No.96 は生焼けで土師質である。

Ｓ－ 15 地点（第９図－ 97 ～ 102、第 10 図－ 103 ～ 113）

No.97・98 は蓋で、No.97 は直立した口縁部をもち、No.98 は平坦な天井部より高さをほとんど変えずにやや外傾した口縁部に到るものである。No.101 ～ 103 は高台付杯で、口径 16㎝前後・底径 9 ㎝前後・高 8 cm 前後のものと考えられる。いずれも外傾した高台より体部に到り、外傾しつつ口縁部でさらにゆるく外反するものと考えられる。No.104 もこれらの高台付杯と同様のものと思われる。No.112 は獣形土器の獣足と考えられる。自然釉がかかり、ヘラで面取りをし、抉入を 5 箇所に施すことによって指を表現している。そうすると、6 本指もしくは 4 本指の足をもつものとなろうか。No.105・113 は甕の口縁部で、No.106 ～ 111 は甕の胴部である。No.102・105・107・108・109・113 は焼き台と考えられる。

５．考察

今回の調査で遺物が確認された地点は 15 地点をかぞえる。遺物の内容をみると窯体の窯壁片や焼きゆがみのはげしいもの、破断面が二次焼成されていたり、自然釉が付着しているもの、そして、No.91 のごとく焼き台として転化されたものなど、窯跡からの遺物と断定してよいものが多くみられる。これら、窯跡からの遺物を採集した地点には、Ｓ－３・Ｓ－４・Ｓ－７・Ｓ－ 11・Ｓ－ 12・Ｓ－ 13・Ｓ－ 14・Ｓ－ 15 の８地点があげられる。このうち、Ｓ－ 11 地点がすでに報告されている（註６）。他は、すべて未報告の地点である。遺物の量・内容・地形から考えて、Ｓ－７地点・Ｓ－ 12 地点・Ｓ－ 14 地点は窯跡としてほぼまちがいない。Ｓ－３地点・Ｓ－ 15 地点も確実であり、このＳ－３地点・Ｓ－ 15 地点・Ｓ－４地点は非常に近接しているので、この３地点は１基の窯跡としてとらえた方がよいかもしれない。なお、この地点は、先年、楠正勝氏の確認した窯跡と同一地点である（註７）。Ｓ－ 10 地点は地形的に窯跡とは考えがたく、Ｓ－２地点も含めて先述のＳ－３・４・15 地点よりの流出ととらえたい。Ｓ－ 13 地点は遺物の量が非常に少ないため、隣接するＳ－ 12 地点に含めてとらえた方がよいであろう。以上によって、Ｓ－７、Ｓ－ 14、Ｓ－ 12・13、Ｓ－３・４・15 の４地点すなわち４基の窯跡を新たに確認したのである。他のＳ－１・Ｓ－５・Ｓ－６・Ｓ－８・Ｓ－９の各地点は、窯跡からの遺物は採集していない。そのうち、Ｓ－５地点は既に報告されている浅川２号窯（註８）からの流出と考えられる。Ｓ－９地点は、小嶋氏報告のＳＡ－Ａ地点（註９）に一部重複し、Ｓ－８地点もそれらに包括してよいかもしれない。Ｓ－１地点とＳ－６地点は、現在のところ詳細は不明といわざるを得ない。

末古窯跡群の年代については、およそ８Ｃ中葉から操業がはじまり、９Ｃ初頭においてその最盛期をむかえたと考えられている。ここで、今回採集した須恵器の年代について考えてみる。研究史のなかでその年代的基準とされているのはＳＴ－ 02 窯とＳＳ－ 02 窯であり、それぞれ末古窯跡群の年代的上限と下限に位置づけられている。そこで、これらのＳＴ－ 02 窯・浅川１号窯・ＳＳ－ 01 窯で採集された須恵器の特徴をあげると、まずＳＴ－ 02 窯では、天井部より平坦面をもたず（もってもあまり明瞭ではない）丸味を帯びて口縁部に到り、口縁部が外傾もしくは直立する蓋に、外傾もしくは直立する高台から直線的に外傾し

つつ口縁部に到る杯が代表的である。ＳＳ－01 窯では、平坦な天井部より再び平坦面をもって口縁部に到り、口縁部が内傾もしくは直立する蓋に、外傾する高台から外傾する体部に到り、口縁部で外反する杯が代表的である。浅川１号窯のものはＳＴ－02 窯とＳＳ－01 窯の中間的な様相を示している。

Ｓ－７地点の須恵器は、蓋が、天井部と口縁部の境界に段（平坦面）をもつものと、もたないものの両者があり、杯類は高台のそのほとんどが外反しているが、口縁部が外反するものと直線的なものの両者がある。これらから考えて、浅川１号窯の時期と考える。Ｓ－３・４・15 地点のものは、蓋の天井部と口縁部の境界が段をなさず、口縁端部が外傾するものであるが、杯類の高台が直立もしくは内傾して外にふんばるタイプのものと､外反するものの両者がある。しかし、杯の口縁部はほとんどが外反するタイプのものであるので、ＳＴ－02 窯・ＳＳ－01 窯両者の様相をもつ浅川１号窯と同時期のものであろう。ただし、Ｓ－３地点の No. ５・10 などのように古相を示すものもあり、ＳＴ－02 期に可能性も否定できないし、No.14 はＳＳ－01 期にはいるものである。Ｓ－12・13 地点のものは､蓋の天上部と口縁部の境界が段をなさず、天井部にはヘラケズリが認められない。また、杯類の高台が直立もしくは内傾して外にふんばるもので、ＳＴ－02 窯により近いものであるが、新相を呈し、浅川１号窯期の可能性もある、Ｓ－14 地点は蓋の天井部と口縁部の境界に段をもっており、杯の高台が外反しているが、No.87 ～ 89 の如く非常に浅い盤の存在から考えると、浅川１号窯期もしくはＳＴ－02 窯期のものと考えられる。Ｓ－11 地点のものは、天井部と口縁部の境界に平坦面をもった蓋があるが、直立もしくは弱くふんばった高台をもつ杯があるので、浅川１号窯に近い時期のものである。

Ｓ－１・Ｓ－２・Ｓ－５・Ｓ－６・Ｓ－８・Ｓ－９・Ｓ－10 の各地点については、遺物の量が少ないため明瞭ではないが、Ｓ－５地点の須恵器は、浅川２号窯の須恵器と類似し､先述の想定をうらづけるとともに、浅川１号窯と同時期であることを示している。Ｓ－２地点とＳ－10 地点の須恵器も、近接するＳ－３・４・15 地点のものと類似しており、浅川１号窯の時期としてよい。Ｓ－８地点・Ｓ－９地点の須恵器は、一部重複する小嶋氏報文のＳＡ－Ａ地点の須恵器を参考にすると、浅川１号窯の時期としてよい。Ｓ－１地点の須恵器は、内傾する高台から直線的にのびる体部がつき、口縁部が外反しない杯であり、ＳＴ－02 窯の時期に近いものと考えてよいだろう。Ｓ－６地点は不明である。

以上、今回の調査でＳＴ－02 窯期（８世紀中葉）のＳ－12・13 地点、浅川１号窯期（８世紀後半）のＳ－７地点・Ｓ－３・４・15 地点、Ｓ－11 地点・Ｓ－14 地点の５期の窯跡を確認し、Ｓ－11 地点を除く４基の窯跡を新たに確認したのである。小嶋氏報文におけるＳＡ－Ａ地点、我々のいうＳ－８・９地点においてかつて布目瓦が採集されているが、今回は採集できなかった。末古窯跡群において瓦生産が浅川１号窯期に行われていたのであり、末古窯跡群の最盛期はＳＳ－01 窯期よりもむしろ浅川１号窯期と考えた方がよいと思われる｡今回採集した須恵器においても、明確にＳＴ－02 窯期・ＳＳ－01 窯期と判断できるものは、むしろ少なく、その多くは浅川１号窯期に含まれる。ＳＴ－02 窯期を上限とし、ＳＳ－01 窯期を下限として、その中間の様相を示す浅川１号窯を設定すれば、おのずと浅川１号窯期に含まれるものが多くなるのも事実であるが、明確にＳＴ－02 窯期とＳＳ－01 窯期の両者の特徴をもつＳ－３・４・15 地点において獣形土器の一部を採集しており、このことも浅川１号窯期における須恵器生産最盛期という推定を補強する材料である。また、糸切り底の須恵器は浅川１号窯・小嶋氏報文ＳＡ－Ａ地点・Ｓ－９地点において採集されており、いずれも浅川１号窯期であることが注目され、瓦生産開始による糸切り技法の須恵器生産への導入（量的にはきわめて少ないが）が想定できるかもしれない。　＜文責：前田清彦＞

6．おわりに

1985 年３月、この調査を計画してから現在でちょうど１年が経過した。終始、学生レベルで行ったため多々不備の点があったが、反面、多くの方々から助言と協力をいただいた。いまだ浅学の我々であるが、ここにひととおりの報告をまとめることによって、協力いただいた方々への感謝の気持ちにかえたい。なお、今回ここに報告したものは、末古窯跡群のうち舘山町内に分布する採集地点についてであり、辰巳町内において採集した資料については次号において報告する所存である。

註

（註１）吉岡康暢「土器の編年的考察」『加賀三浦遺跡の研究』石川県教育委員会・松任町教育委員会　1967.

（註２）小嶋芳孝「金沢市末古窯址調査予報」『石川考古学研究会々誌第 13 号』 1970.

（註３）小嶋芳孝「金沢市末町付近の窯跡群とその歴史的性格」『石川考古学研究会々誌第 18 号』 1975.

（註４）『浅川第１号窯跡（灰原）調査報告書』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会　1976.

（註５）『浅川第２号窯跡発掘調査報告書』金沢市教育委員会・金沢市埋蔵文化財調査委員会　1980.

（註６）『金沢市遺跡地図』金沢市文化財紀要１－（１）金沢市教育員会　1973.

（註７）楠木勝氏の御教示により確認した。

（註８）（註５）に同じ。

（註９）（註３）に同じ。

＜調査参加者＞

山下平重・東喜代秀・佐藤久常・前川博美・土田稔・児玉剛・田中宗之・東明子・安達豊・石谷孝子・北村圭弘・小林孝誌・関口佳江・前田清彦

再整理・再報告にあたって

松井広信
（金沢大学大学院人間社会環境研究科）

当資料とその報告が末古窯跡群の研究上、重要なものであることは認識されていた。しかし、当資料は考古学研究室の収蔵庫に 30 年前から袋詰めの状態で保管されており、また、その報告は一般には入手が難しい状態であった。そこで、保管状態の確認および再整理、また再報告を行うことにした。

再報告ではまず手書きの本文をそのまま Word で文章化した。観察表はレイアウトを変えたものの、データはそのまま使用している。実測図に関しては、トレース原本が発見できなかったため、トレース割り付けのコピーから転載して使用している。当時の実測図は当研究室で保管している。ただし、修正した実測図もいくつかある。報告番号 105（S15）は当時の報告では直立する頸部として報告していたが、末古窯跡群で発見されている甕はハの字状に開く口縁を持つため、傾きを修正した。報告番号 106（S15）は甕の頸部と報告されていたが、横瓶の体部を塞いだ蓋状部分であるので、ここで訂正しておく。報告番号 113（S15）は口径が復元できたため、再実測して報告している。復元口径は 34.8cm。

当時の拓本はほとんど残っておらず、報告に掲載済みのものも調整が判別できないため拓本を取り直した。また「末古窯跡群分布調査報告　その２」で修正している箇所は修正後の状態で掲載した（第２図の窯跡位置）。

再掲するにあたって紛失資料を確認した。原報告で報告済みの内、紛失した資料は報告番号 94（S14）と報告番号 112(S15)である。管理の甘さを痛感しているところである。未報告資料に関しては図化しうる遺物を報告しようとしたが、時間の都合上間に合わず Web 雑誌『金大考古』に掲載することにする。現在、「末古窯跡群分布調査報告　その２」で報告した T 地区の遺物を整理中である。近いうちに合わせて公開したいと考えている。

再報告にあたっては、当時中心的に活動にあたっていた前田清彦氏に承諾をいただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

再報告に関する整理作業参加者

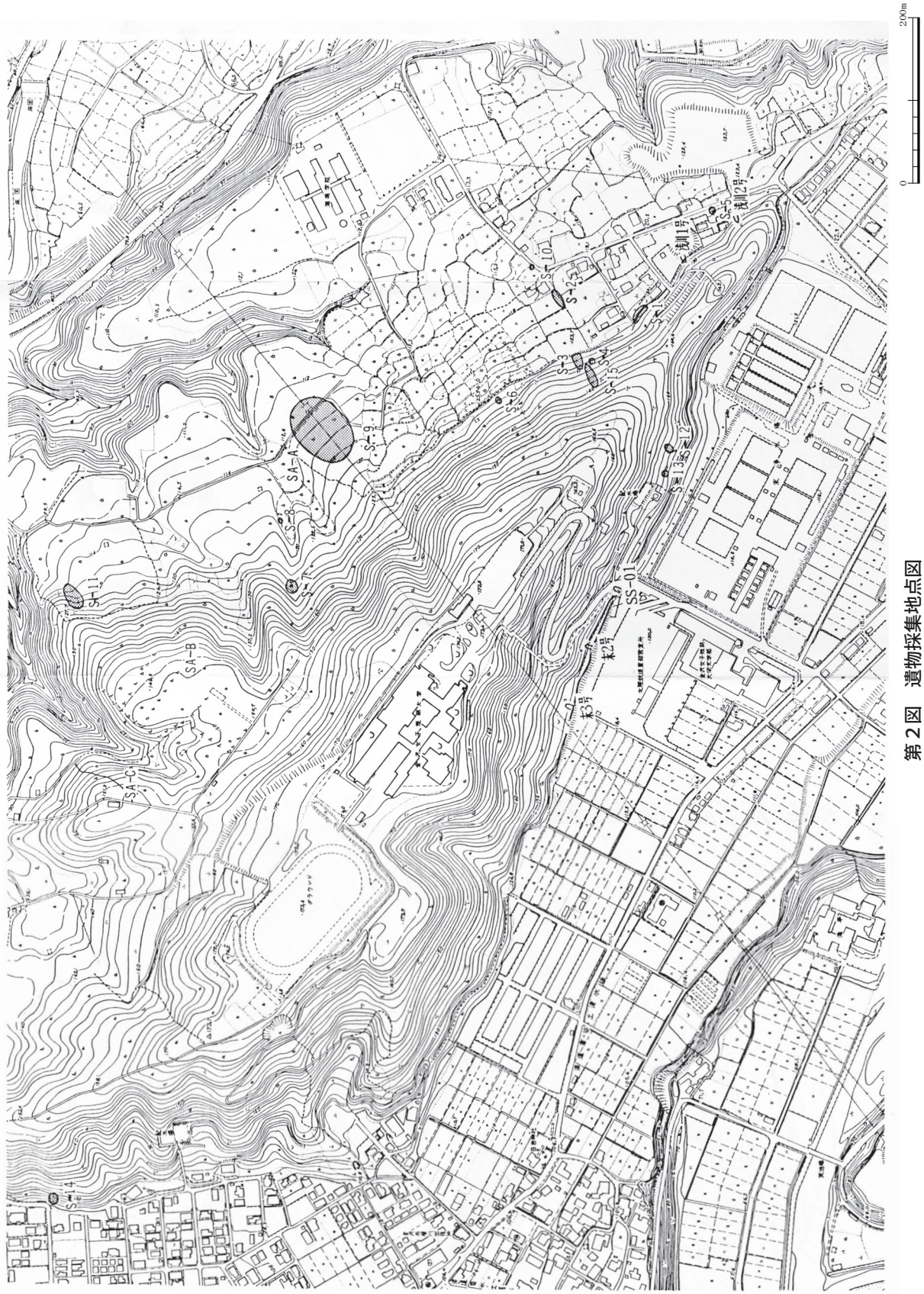
松井広信、立川康華、中川拓也、川　晴香、水谷侃司

原報告

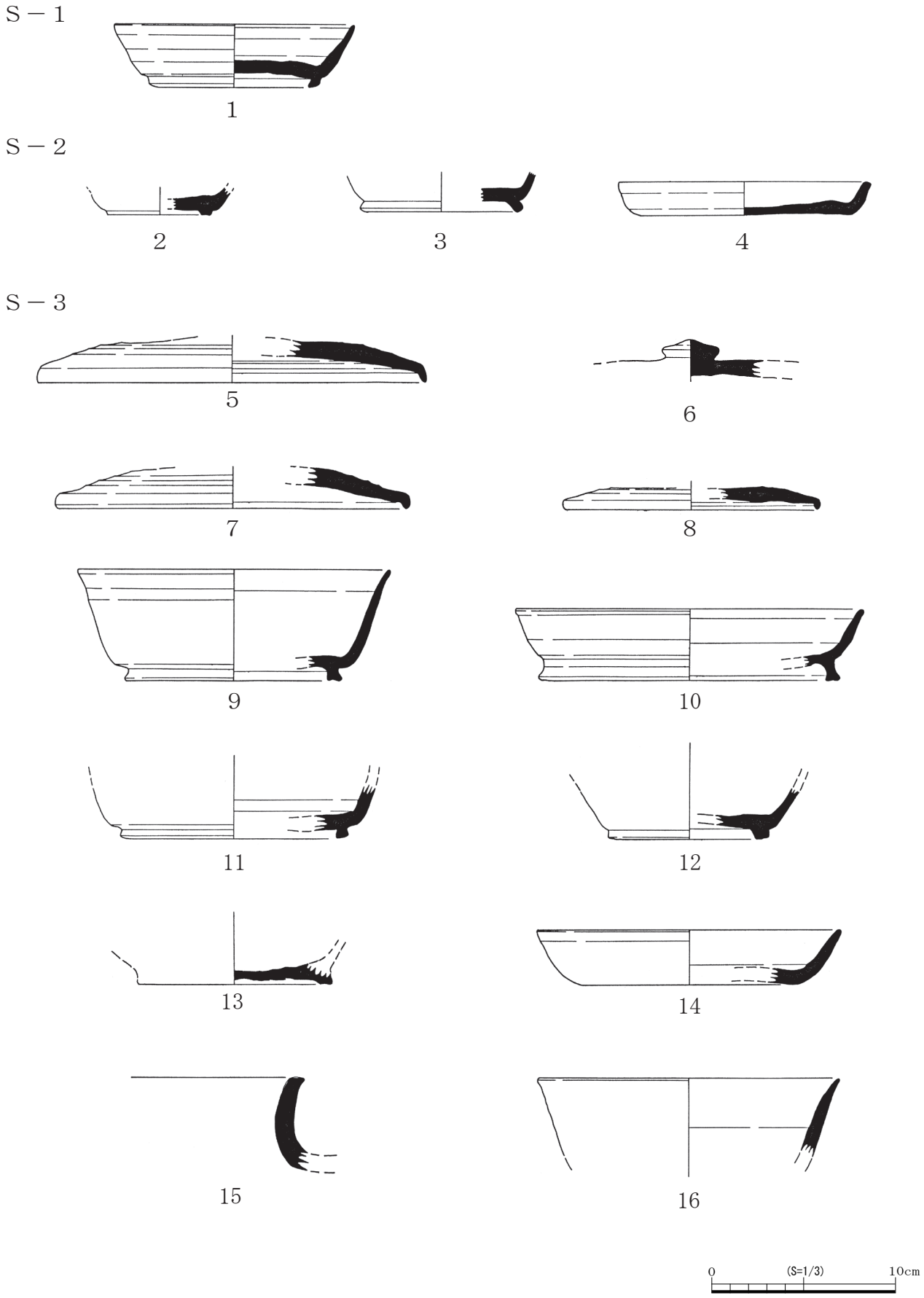
金沢大学考古学研究室　1986「末古窯跡群分布調査報告」『金大考古』第 12 号　1 -42 頁 .

第１図　周辺の遺跡分布図（50,000 分の 1）

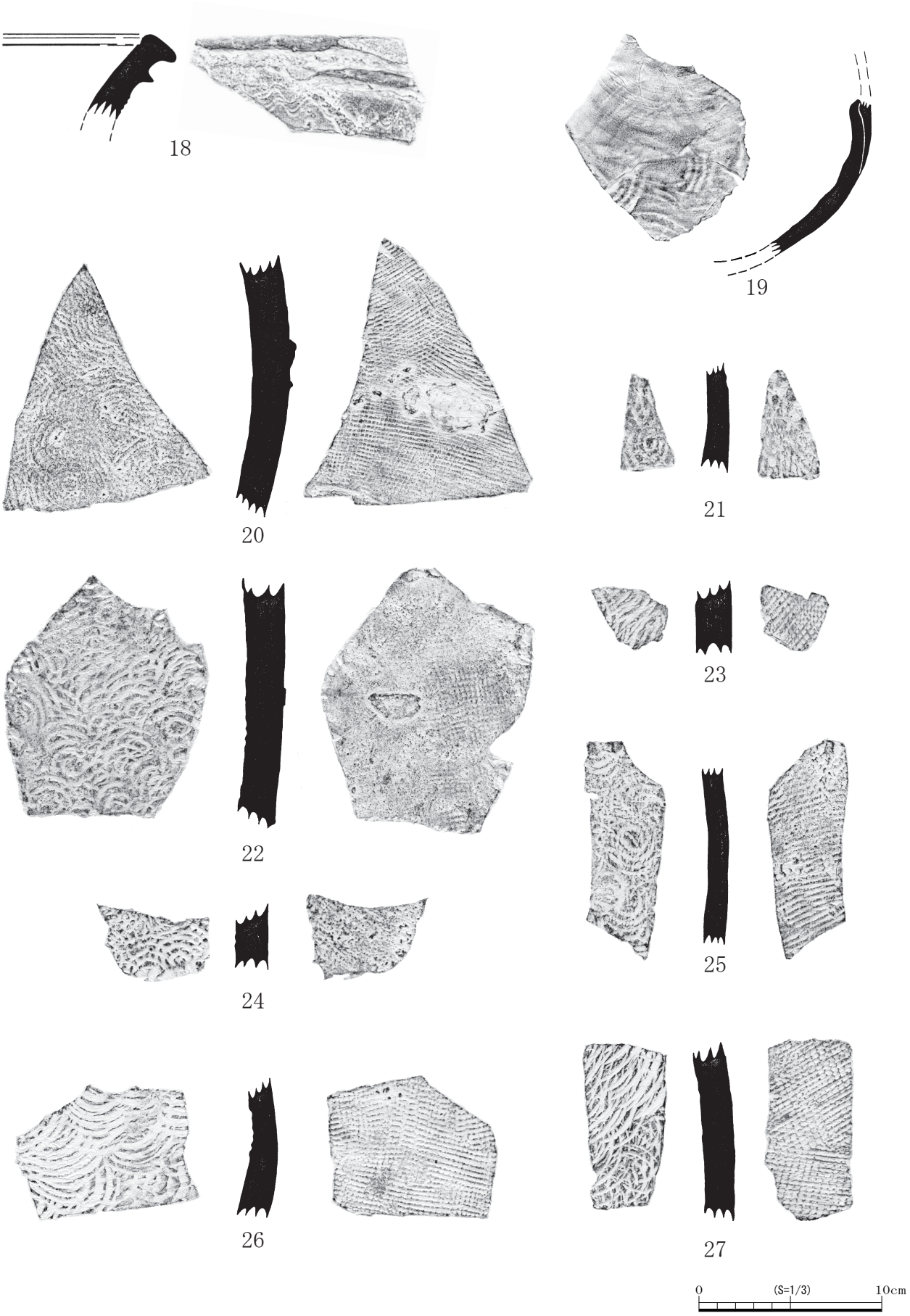
1．伝灯寺横穴群（古墳）
2．東横江横穴群（古墳）
3．卯辰山窯跡（奈良・平安）
4．鈴見遺跡（奈良・平安）
5．田上遺跡（古墳）
6．若松遺跡（奈良・平安）
7．崎浦御経塚遺跡（古墳）
8．三口新町遺跡（平安）
9．大桑橋遺跡（古墳）
10．土清水遺跡（平安）
11．長坂遺跡（古墳）
12．大桑七兵衛平遺跡（平安）
13．野田山三角点古墳（古墳）
14．野田山遺跡（古墳）
15．さこ山Ｃ遺跡（縄文・古墳）
16．三小牛さこ山遺跡（奈良）
17．浅川１号窯（平安）
18．浅川２～３号窯（奈良・平安）
19．浅川４～６号窯（奈良・平安）
20．末１～３号窯（奈良・平安）
21．辰巳１～３号窯（奈良・平安）


SA-A
SA-B
SA-C
SH-11
S-1
S-2
S-3
S-4
S-5
S-6
S-7
S-8
S-9
S-10
S-12
S-13
S-14
SS-01
SS-5
浅川1号
浅川2号
末2号
末3号
0
200m

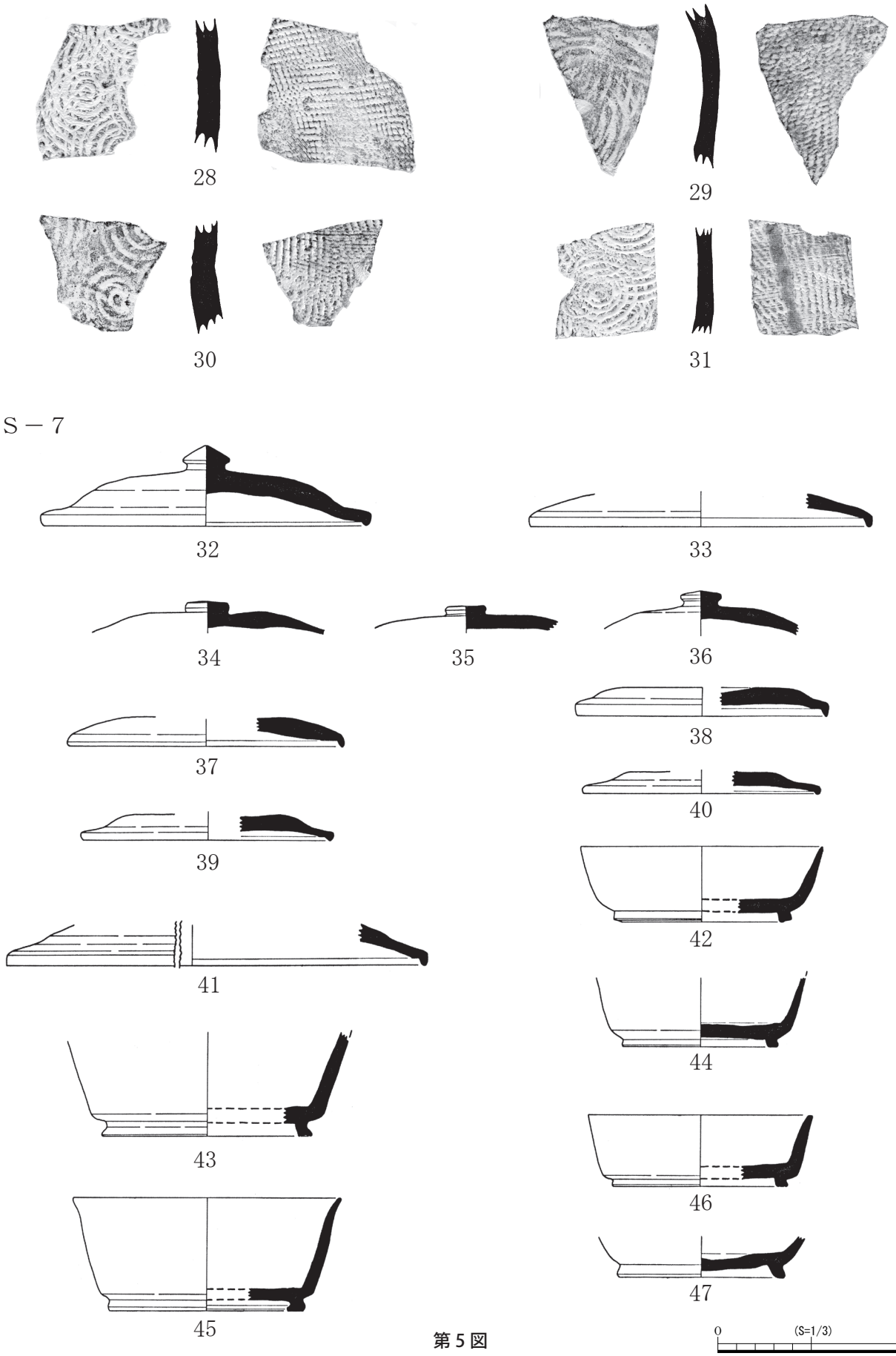
第２図　遺物採集地点図



第 3 図

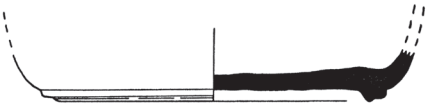


第 4 図


28
29
30
31
S－7
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
(S=1/3)
10cm

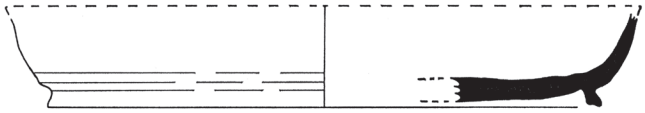
第 5 図

S－8

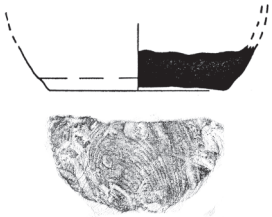


48

S－9

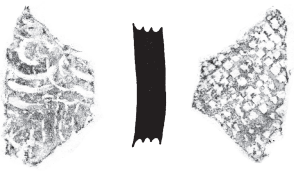


49

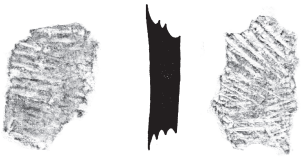


50

51

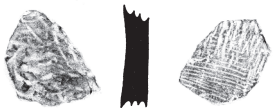


52



53

54

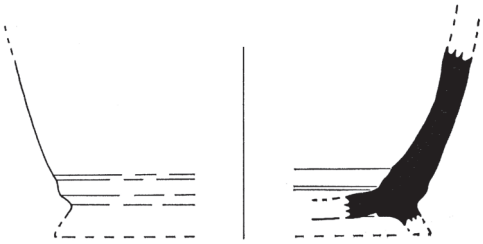


55

56

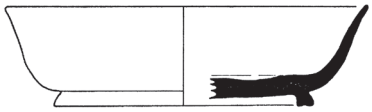
57

S－10

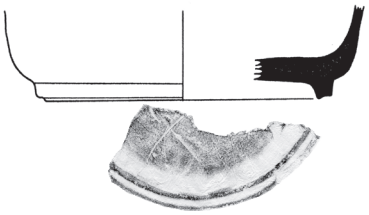


58

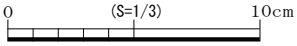
S－11



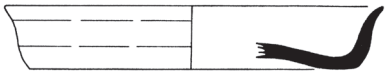
59



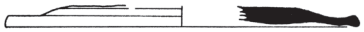
60



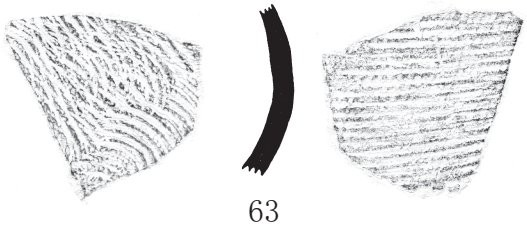
第 6 図



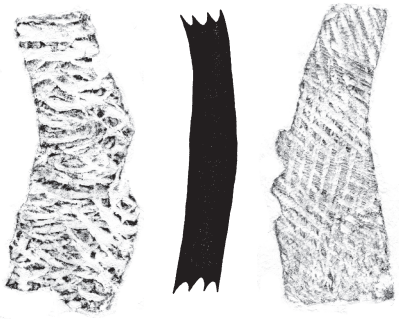
61



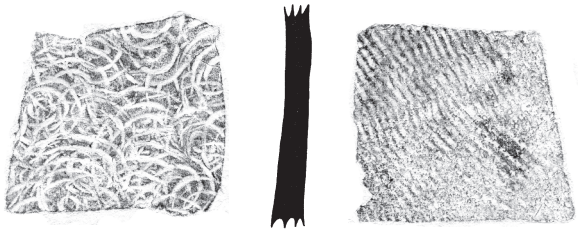
62



63



64



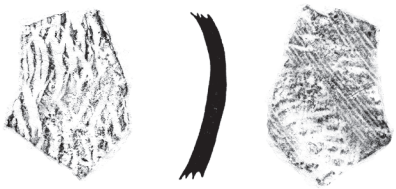
65

66

67

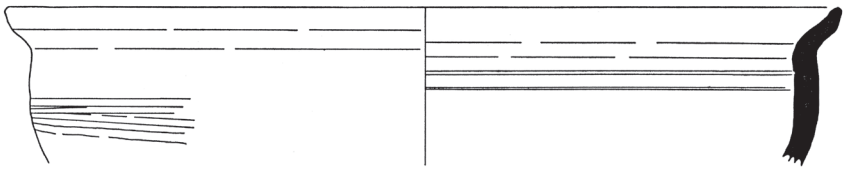
68

69



70

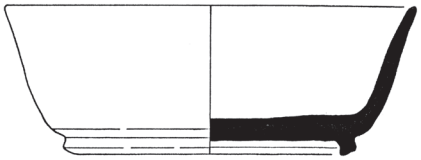
S－12



71

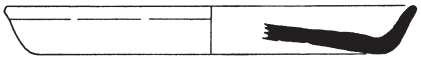
0 (S=1/3) 10cm

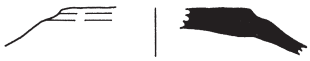
第 7 図

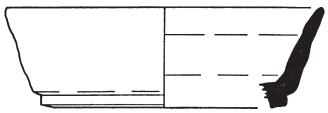

72

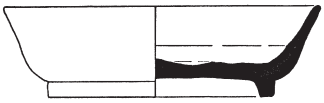
73

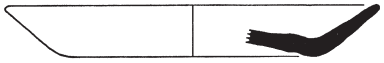
74

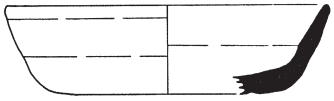

75

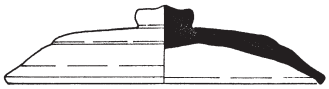

76


77

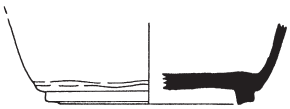

78

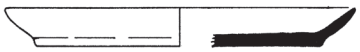

79


80


81

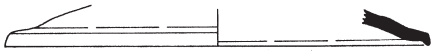
S－13

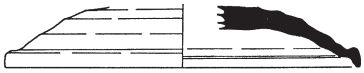

82

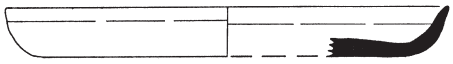

83

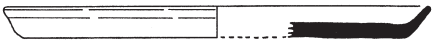
S－14

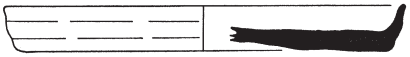
84

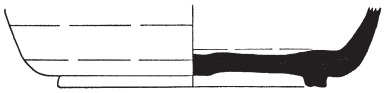

85

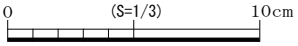

86


87

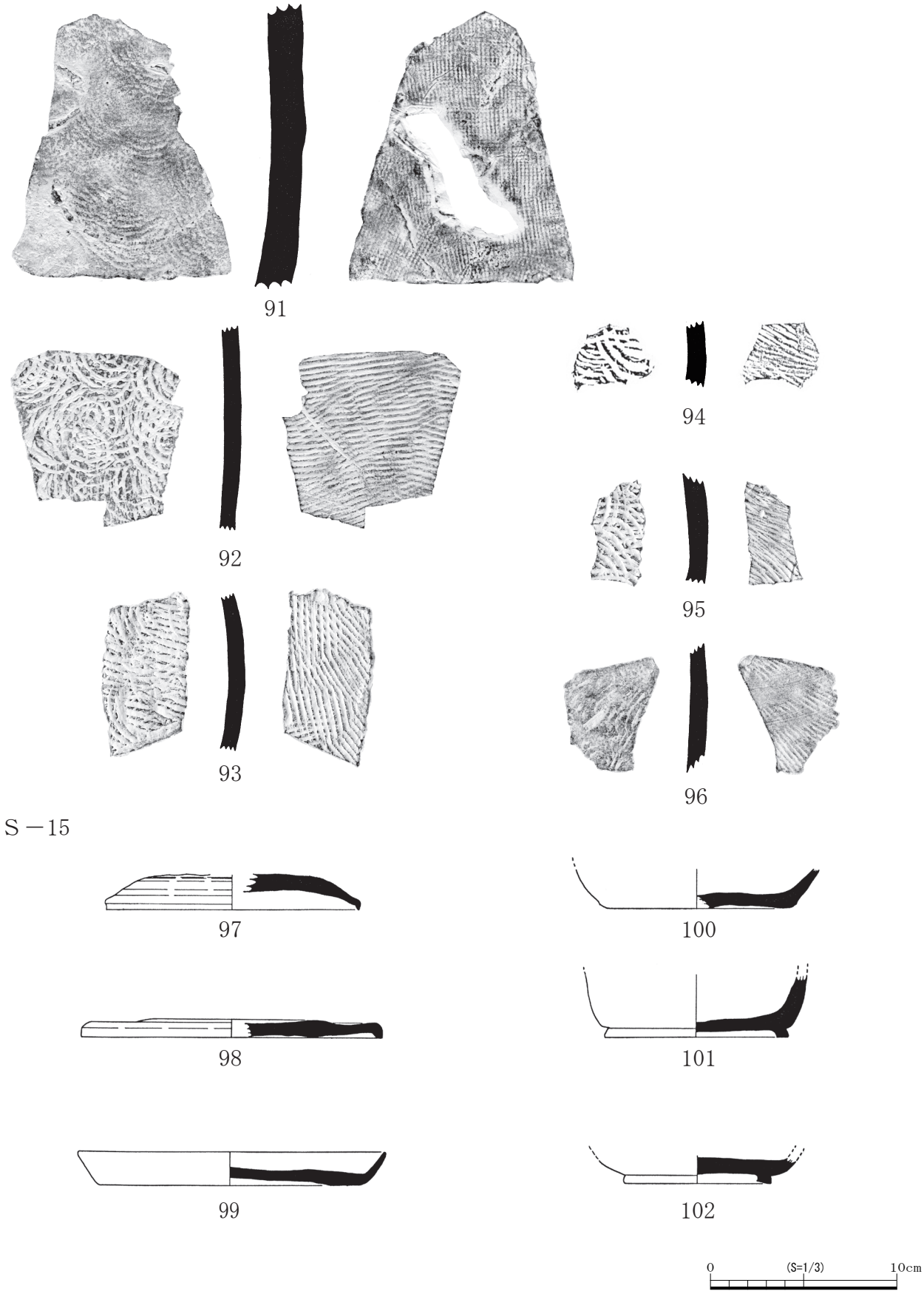

88


89

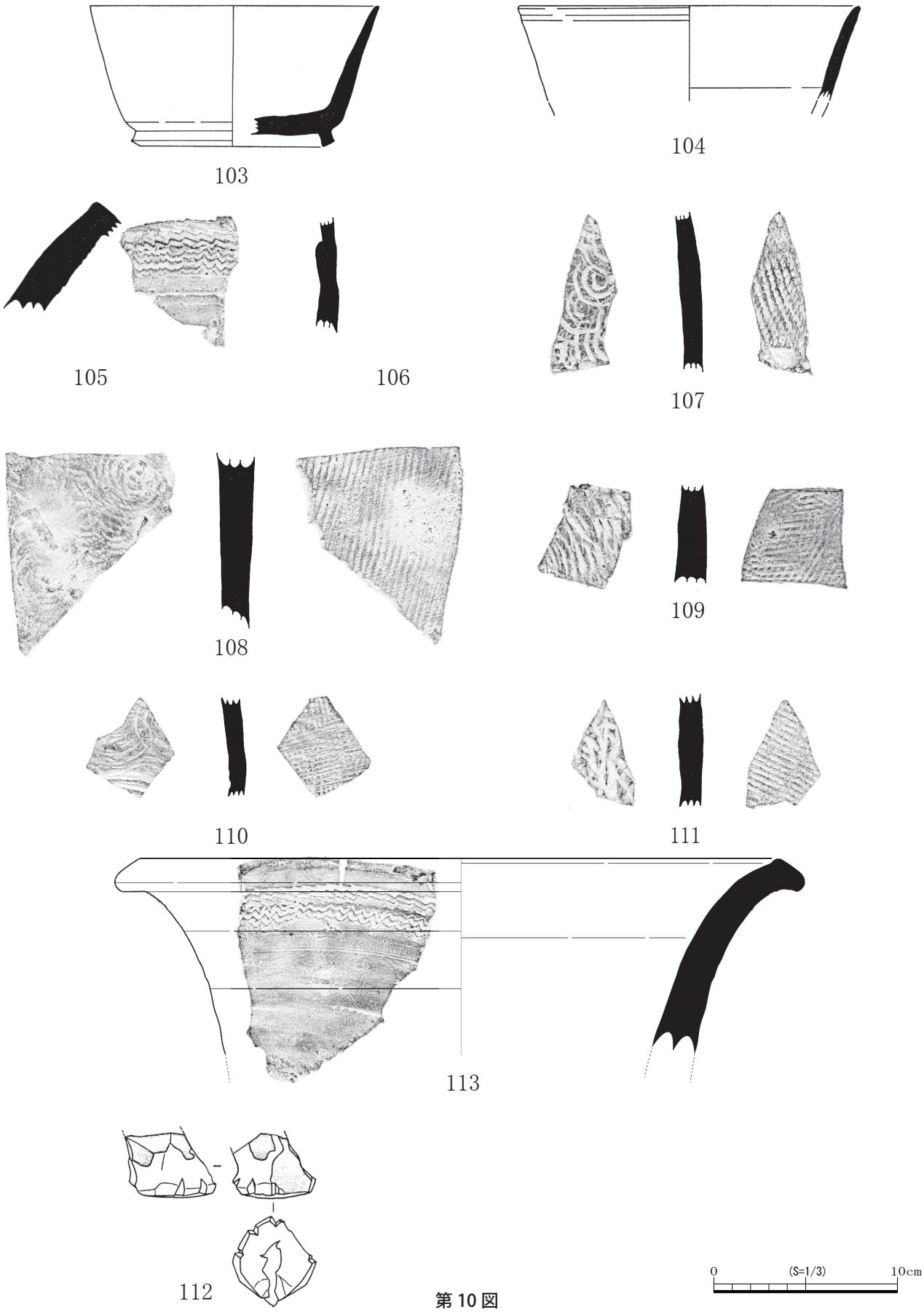

90



第 8 図



第 9 図



第 10 図

第 1 表　S-1, S-2, S-3 出土遺物遺物観察表

S-1

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
1	高台付杯	底部～口縁部	13	9.2	3.4	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.1㎜大の砂粒含む。	内	黒灰色	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗灰褐		

S-2

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
2	高台付杯	底部		5.6		内	回転ナデ	0.3㎜大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	淡青灰色。		
3	高台付杯	底部		8.1		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	底部外面にヘラ記号。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	青灰色。		
4	盤	底部～口縁部	13.6	11.7	1.8	内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。口縁部付近に自然釉。		

S-3

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
5	蓋	口縁部～天井部	21.1			内	回転ナデ。天井部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	2mm 大の礫含む。	内	青灰色。	やや不良	
						外	回転ナデ。天井部 4/5 を回転ヘラケズリ。		外	青灰色。		
6	蓋	天井部～鈕				内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。自然釉あり。	良好	焼き台。鈕径 3.0cm
						外	回転ナデ。天井部回転ヘラケズリ。		外	青灰色。自然釉あり。		
7	蓋	口縁部～天井部	19.0			内	回転ナデ。天井部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	やや不良	
						外	回転ナデ。天井部 4/5 を回転ヘラケズリ。		外	暗青灰色。		
8	蓋	口縁部～天井部	13.6			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。天井部 6/7 を回転ヘラケズリ。		外	青灰色。		
9	高台付杯	底部～口縁部	16.9	11.7	6.05	内	回転ナデ。底部は、回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。		
10	高台付盤	底部～口縁部	18.8	16.3	3.9	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	やや不良	
						外	回転ナデ。		外	淡青灰色。		
11	高台付杯	底部～体部		12.3		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	暗青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗青灰色。		
12	高台付杯	底部～体部		8.8		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。自然釉あり。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
13	高台付杯	底部		12.4		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	青灰色。		
14	盤	底部～口縁部	16.5	11.6	2.9	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	淡青灰色。		
15	甕	口縁部～頸部				内		1mm 大の砂粒含む。	内	暗灰色。自然釉あり。	良好	焼き台
						外			外	暗灰色。自然釉あり。		
16	杯	口縁部～体部	16.4			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	青灰色。		
17												表、図版、とも欠
18	甕	口縁部				内	回転ナデ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。自然釉あり。	良好	焼き台
						外	回転ナデ。3 条の櫛描波状文。		外	淡青灰色。自然釉あり。		

第２表　S-3, S-7 出土遺物遺物観察表

19	横瓶	胴部				内	回転ナデ。円弧タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	やや良好	
						外	カキ目。		外	灰色。自然釉あり。		
20	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	黒褐色。	良好	焼き台
						外	平行タタキ。		外	黒褐色。		
21	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	暗青灰色。	良好	
						外	斜格子タタキ。		外	暗青灰色。		
22	甕	胴部				内	同心円タタキ。	1mm大の砂粒含む。	内	青灰色。自然釉あり。	良好	焼き台
						外	格子タタキ。		外	青灰色。自然釉あり。		
23	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.2mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	斜格子タタキ。		外	青灰色。		
24	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.2mm 大の砂粒含む。	内	暗青灰色。	良好	
						外	格子タタキ。		外	暗青灰色。		
25	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
26	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.2mm 大の砂粒含む。	内	灰褐色。自然釉あり。	やや不良	焼き台
						外	格子タタキ。		外	灰褐色。自然釉あり。		
27	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	焼き台
						外	格子タタキ。		外	青灰色。		
28	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	やや良好	
						外	格子タタキの後、カキ目。		外	淡青灰色。		
29	甕	胴部				内	円弧タタキ。	1mm大の砂粒含む。	内	灰色。	やや良好	
						外	斜格子タタキ。		外	青灰色。自然釉あり。		
30	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	黒褐色。	良好	
						外	格子タタキ。		外	黒褐色。		
31	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	青灰色。自然釉あり。		

S-7

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
32	蓋	口縁部～鈕	19.6		4.3	内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	灰色。	やや不良	鈕径 2.5cm
						外	回転ナデ。天井部 1/2 を回転ヘラケズリ。		外	灰色。		
33	蓋	口縁部	18.4			内	回転ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。自然釉。	良好	
						外	回転ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
34	蓋	天井部～鈕				内	回転ナデ。天井部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。自然釉あり。	良好	焼き台。鈕径 2.4cm
						外	回転ナデ。天井部は約 1/2 を回転ヘラケズリ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
35	蓋	天井部～鈕				内	回転ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。	やや良好	鈕径 2..2cm
						外	回転ナデ。天井部は約 1/2 を回転ヘラケズリ。		外	淡青灰色。		
36	蓋	天井部～鈕				内	回転ナデ。天井部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	鈕径 2..2cm
						外	回転ナデ。天井部は約 1/2 を回転ヘラケズリ。		外	青灰色。		
37	蓋	口縁部～天井部	14.6			内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	暗灰色。	良好	重ね焼き痕跡が明瞭。
						外	回転ナデ。		外	暗灰色。口縁部に自然釉。		
38	蓋	口縁部～天井部	13.6			内	回転ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	暗灰色。	良好	
						外	回転ナデ。天井部は回転ナデの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
39	蓋	口縁部～天井部	13.5			内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
40	蓋	口縁部～天井部	12.8			内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	重ね焼き痕跡が明瞭。
						外	回転ナデ。天井部は 2/3 を回転ヘラケズリ。		外	青灰色。		
41	蓋	口縁部～天井部	22.4			内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		

第３表　S-7, S-8, S-9, S-10, S-11 出土遺物遺物観察表

42	高台付杯	底部～口縁部	12.8	8.6	4.0	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
43	高台付杯	底部～体部		11.2		内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	淡青灰色。		
44	高台付杯	底部～体部		8.2		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.2mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	やや良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
45	高台付杯	底部～口縁部	14.2	10.4	6.1	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	淡青灰色。		
46	高台付杯	底部～口縁部	12.0	9.4	3.8	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	青灰色。	良好	重ね焼き痕跡が明瞭。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
47	高台付杯	底部～体部		8.8		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	4mm 大の砂粒を含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
S-8												
報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
48	高台付杯	底部		12.4		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	淡青灰色。		
S-9												
報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
49	高台付杯	底部～体部	推定 25.2	22.0	推定 4.0	内	体部は回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	灰色。一部に自然釉あり。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	暗青灰色。一部に自然釉あり。		
50	不明	底部		7.0		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	小型壺か。
						外	回転ナデ。底部は回転糸切り。		外	淡青灰色。		
51	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	灰褐色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	灰褐色。		
52	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	暗灰色。	やや不良	
						外	格子タタキ。		外	黒灰色。		
53	甕	胴部				内	平行タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	灰褐色。	やや不良	
						外	平行タタキ。		外	黒褐色。		
54	甕	胴部				内	円弧タタキ。	1mm 大の砂粒含む。	内	黒褐色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	灰褐色。		
55	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	暗青灰色。		
56	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	やや不良	
						外	平行タタキ。		外	灰色。		
57	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	やや不良	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	灰色。		
S-10												
報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
58	不明	底部		14.6		内	回転ナデ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	茶褐色。自然釉あり。	良好	焼き台。壺の底部か。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り。		外	黒褐色。底部は灰色。		
S-11												
報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
59	高台付杯	底部～口縁部	14.3	10.2	3.9	内	回転ナデ。	2mm 大の礫含む。	内	灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。		
60	高台付杯	底部～体部		10.8		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	灰色。	良好	底部外面にヘラ記号。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	青灰色。		

第４表　S-11, S-12 出土遺物遺物観察表

61	盤	底部～口縁部	14.1	13.2	2.2	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	2mm 大の礫含む。	内	淡青灰色。	やや良好	焼きゆがみあり。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り。		外	淡青灰色。		
62	蓋	口縁部～天井部	14.0			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。天井部 2/3 を回転ヘラケズリ。		外	青灰色。		
63	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	黄灰褐色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	灰褐色。		
64	甕	胴部				内	円弧タタキ。	2mm 大の礫含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	青灰色。		
65	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.2mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	黒灰色で、自然釉あり。		
66	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	青灰色。		
67	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
68	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	灰褐色。	やや良好	
						外	斜格子タタキ。		外	青灰色。		
69	甕	胴部				内	同心円タタキ。	1mm 大の砂粒含む。	内	暗青灰色。自然釉あり。	良好	
						外	平行タタキ。		外	灰褐色。		
70	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	淡青灰色。自然釉あり。		

S-12

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
71	鍋	口縁部～頸部	33.2			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	やや良好	
						外	回転ナデの後、カキ目。		外	青灰色。		
72	高台付杯	底部～口縁部	16.2	11.6	6.0	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗青灰色。		
73	高台付杯	底部		11.6		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。		
74	盤	底部		13.4		内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	暗灰色。	やや不良	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。		
75	盤	底部～口縁部	16.2	14.2	2.0	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	暗褐色。	やや不良	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗褐色。		
76	蓋	天井部				内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	黄褐色。	不良	土師質
						外	回転ナデ。天井部 1/2 をヘラケズリ。		外	黄褐色。		
77	高台付杯	底部～口縁部	12.6	9.6	4.0	内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒含む。	内	灰褐色。	やや不良	
						外	回転ナデ。		外	青灰色。		
78	高台付杯	底部～口縁部	13.0	9.4	3.5	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
79	盤	底部～口縁部	14.8	10.8	1.9	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	焼きゆがみあり。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗青灰色。		
80	杯	底部～口縁部	13.0	8.8	3.5	内	回転ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	灰褐色。	不良	土師質
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	灰褐色。		
81	蓋	口縁部～鈕	12.6		3.0	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	鈕径 2..3cm
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		

第５表　S-13, S-14, S-15 出土遺物遺物観察表

S-13

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
82	高台付杯	底部～体部		8.2		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	暗青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	暗青灰色。		
83	盤	底部～口縁部	14.2	11.4	1.5	内	回転ナデ。	0.3mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。口縁部付近に自然釉あり。		

S-14

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
84	蓋	鈕				内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	鈕　径 3..2cm。鈕高 1.1cm
						外	回転ナデ。		外	青灰色。		
85	蓋	口縁部	17.0			内	回転ナデ。	2mm 大の礫含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	青灰色。		
86	蓋	口縁部～天井部	14.0			内	回転ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	青灰色。	やや良好	
						外	回転ナデ。天井部 6/7 をヘラケズリ。		外	淡青灰色。		
87	盤	底部～口縁部	17.6	14.4	2.0	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
88	盤	底部～口縁部	17.0	15.0	1.2	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。		
89	盤	底部～口縁部	15.8	14.6	1.8	内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	焼きゆがみあり。
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	暗青灰色。		
90	高台付杯	底部～体部		12.0		内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	やや良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切り、未調整。		外	淡青灰色。		
91	甕	胴部				内	同心円タタキ。	1mm大の砂粒含む。	内	灰褐色。自然釉あり。	やや良好	焼き台
						外	格子タタキ。		外	青灰色。自然釉あり。		
92	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
93	甕	胴部				内	平行タタキの後、円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
94	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
95	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	平行タタキ。		外	青灰色。		
96	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.1mm 大の砂粒含む。	内	赤褐色。	不良	土師質
						外	平行タタキの後、カキ目。		外	赤褐色。		

S-15

報告番号	器種	部位	法量（cm）			調整		胎土	色調		焼成	備考
			口径	底径	器高							
97	蓋	口縁部～天井部	13.8			内	回転ナデの後、不定方向ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。天井部 6/7 をヘラケズリ。		外	淡青灰色。		
98	蓋	口縁部～天井部	16.0			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	良好	焼きゆがみあり。
						外	回転ナデ。天井部 2/3 をヘラケズリ。		外	淡青灰色。		
99	盤	底部～口縁部	16.2	14.4	1.8	内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。自然釉あり。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。自然釉あり。		
100	杯	底部～体部		10.4		内	回転ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	青灰色。自然釉あり。		
101	高台付杯	底部～体部		9.8		内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	淡赤褐色。	不良	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。底部は淡赤褐色。		
102	高台付杯	底部		7.8		内		0.2mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	やや不良	焼き台
						外			外	淡青灰色。		

第６表　S-15 出土遺物遺物観察表

103	高台付杯	底部～口縁部	15.6	11.0	7.7	内	回転ナデ。底部は回転ナデの後、不定方向ナデ。	1.5mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	やや良好	
						外	回転ナデ。底部は回転ヘラ切りの後、不定方向ナデ。		外	淡青灰色。		
104	杯	口縁部～体部	18.4			内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	回転ナデ。		外	青灰色。		
105	甕	口縁部				内	回転ナデ。	0.5mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。自然釉あり。	やや良好	焼き台
						外	回転ナデ。6 条の櫛描波状文。		外	灰色。自然釉あり。		
106	甕	頸部				内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。	やや良好	
						外	平行タタキ。		外	灰色。自然釉あり。		
107	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.1mm 大の砂粒を含む。	内	灰褐色。自然釉あり。	良好	焼き台
						外	斜格子タタキの後、カキ目。		外	暗青灰色。自然釉あり。		
108	甕	胴部				内	同心円タタキ。	0.5mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。自然釉あり。	やや良好	焼き台
						外	平行タタキ。		外	暗灰色。自然釉あり。		
109	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.2mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。	やや良好	焼き台
						外	平行タタキ。		外	暗灰色。自然釉あり。		
110	甕	胴部				内	円弧タタキ。	0.5mm 大の砂粒を含む。	内	淡青灰色。	良好	
						外	斜格子タタキ。		外	淡青灰色。		
111	甕	胴部				内	円弧タタキ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。	やや良好	
						外	平行タタキ。		外	灰色。		
112	不明					内	ヘラによる面取り。	0.1mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。自然釉あり。	やや良好	長径 5.0cm。短径 4.5cm。四足獣形土器の定か。
						外			外			
113	甕	口縁部				内	回転ナデ。	1mm 大の砂粒を含む。	内	灰色。	良好	焼き台
						外	回転ナデ。5 条の櫛描波状文。		外	暗青灰色。		